

カトリック六甲教会 教会報

2014

7

No.511

2014年度 年次報告会を終えて

小教区評議会議長 飯塚

6月15日、六甲教会『小教区評議会年次報告会』が開かれました。W杯の日本初戦の試合の最中であるにもかかわらず、50余名の方の参集を得ました。

はじめにアルフレド神父さまより、「この機会に六甲教会のこれまでを聞きたいし、教会員の皆さんのお考えやご意見を聴かせてください」との挨拶がありました。

次いで、この1年の報告（新教皇誕生と前年からの信仰年、合同堅信式、淡路島での神戸地区大会、教会報500号 … Fr.安芸、Fr.松村 Fr.片柳との別れ）がありました。

そして、教会の会計はプロジェクターを使用し、表とグラフで示され、少しずつ収入が減少の傾向にあることなど報告されました。

続いて、今年度の評議員・地区会役員の紹介がなされ、評議会と教会員との意思疎通へ向けての呼びかけが行われました。

小林副議長から、日本のカトリック教会の現状(統計)、大阪大司教区の構成と神戸地区・東ブロック、そして六甲教会の組織についてわかりやすい説明がありました。

最後に壮年会・婦人会の現在、会計報告について等、活発な質疑応答が行われました。議長からは年次報告会の存在意義やネーミングについての問いかけもなされました。また信徒からは「教会の前を通る数多くの若者たち(その死因で自殺が多い)に対して、福音や教会への招きの積極的な取り組み」について、提案がありました。

宣教と祈りの共同体=教会への歩みの意味と必要性を強く感じさせられた「報告会」でありました。これからはさらなる教会内の情報の共有を心がけていきたいと思います。その為に教会報への投稿及び提案箱などの活用、また評議員へのストレートな形での積極的なご意見・ご提案をお願いしたいと思います。

W杯の結果が気になりながらも、予定の1時間を越える集いに熱心なご参加を頂いたことに対し、感謝の気持ちを込めて。

★ 議事次第

- 1、アルフレド主任司祭挨拶
- 2、この一年を振り返って
- 3、教会会計報告
- 4、評議員・地区会役員紹介
- 5、教会共同体組織について
- 6、質疑応答





ナルドの花たより

「ナルドの花たより」について

広報部

先月号から「ナルドの花たより」というタイトルで、教皇様のことばをみなさまにお伝えするコーナーを設けました。先月は今年4月のヨハネ23世とヨハネ・パウロ2世の列聖に因み、ヨハネ・パウロ2世のおことばを掲載いたしました。今月号からは、主に現教皇フランシスコのおことばをお伝えしていきたいと思えます。

コーナータイトル「ナルドの花」は教皇フランシスコの紋章に描かれている植物です。

以下テキストはバチカン放送局ホームページからの転載です。

＜教皇フランシスコの紋章＞

教皇フランシスコの紋章に描かれたシンボルと、下に記されたモットーについて解説する。

－ 紋章の盾 －

教皇フランシスコは、教皇紋章として、司教叙階の際に作成した紋章を続けて使用される。紋章全体は空色で、ベネディクト16世の時から使用されている教皇のシンボル紋章内部は、教皇の出身修道会、イエズス会の紋章が描かれている。キリストを象徴する燃える太陽の中に、赤文字でイエスを表す「IHS」が書かれている。Hの上には十字架があり、その下には黒い3本の釘がある。下部には、図案化された星とナルドの花が描かれている。星は、聖母マリアを象徴し、ナルドの花は、教会の保護者聖ヨゼフを意味する。ご自分の紋章にこのようなシンボルを使用することによって、教皇は聖母マリアと聖ヨゼフへの特別な信心を表されている。



－ モットーの意味 －

教皇フランシスコの紋章のモットー “*Miserando atque eligendo*”（憐れみ、そして選ばれた）は、聖ベアータ・ヴェネラビリス司祭の説教の言葉から取られている。聖ベアータは、使徒聖マタイの召命のエピソードを次のように解説している。「イエスは徴税人（マタイ）を見つめ、『憐れみ、そして選ばれ』、わたしについてきなさいと言った」。

この言葉は、教皇フランシスコの霊的生活において特別な意味合いを持つことになった。1953年の聖マタイの祝日に、17歳だった若いホルヘ・ベルゴリオは、まったく特別な方法で、その人生における神の憐れみの現存を強く体験した。その時、神の憐れみが自分自身の心の奥底に下ってきたことを強く感じたと、後に告白している。そして、神はイエズス会創立者聖イグナチオ・ロヨラにされたように、優しい愛の眼差しをもって、彼を修道生活に召された。

ベルゴリオ神父は、司教に選ばれた時、教会における自分の全面的な奉獻の開始をしるすその際に、生涯のモットー、計画として、聖ベアータのあの言葉「憐れみ、そして選ばれた」を採り、教皇紋章の中に使用することを望まれた。

キリストの聖体の祭日の6月22日、教皇フランシスコは、サンピトロ広場に集まった大勢の信者と共に、教皇公邸書斎の窓から「お告げの祈り」を行いました。その後、教皇は次のように呼びかけました。

わたしたちがミサにあずかり、キリストのからだに養われるたびに、イエスと聖霊がわたしたちの中で働き、わたしたちの心を形作り、福音にかなった行いに表われる心の持ち方を示します。まずはみことばに従い、それから兄弟愛を深め、キリストをあかする勇気を持ち、愛の創造性を発揮し、失望している人に希望を与え、排除された人を受け入れます。そうすれば、聖体によってキリスト者の生活は成熟します。開かれた心で受け入れたキリストの愛によって、わたしたちは変えられます。人間の限られたはかりではなく、神のはかりに従って愛せるように変えられるのです。それでは、神のはかりとはどのようなものでしょうか。神のはかりには限りがありません。神のはかりには目盛がありません。全部、全部、全部です。神の愛をはかることなどできません。神の愛は、はかり知れません。そしてその時、わたしたちは自分を愛していない人をも愛せるようになります。それは容易なことではありません。自分を愛していない人を愛することは、簡単ではありません。なぜなら、もし、誰かが自分を愛していないことが分かったら、わたしたちもその人を愛さないようになるからです。それではいけません。自分を愛していない人も愛さなければなりません。わたしたちは、善をもって悪に対抗し、ゆるし、分かち合い、受け入れなければなりません。イエスとイエスの霊のおかげで、わたしたちのいのちも兄弟姉妹のために「裂いたパン」となります。このように生きることを通して、わたしたちは真の喜びを見いだします。それは、自分自身を贈り物としてささげる喜びです。それは、わたしたちは何もしていないのに、最初から与えられていた素晴らしい贈り物をお返しする喜びです。これは美しいことです。わたしたちのいのちが贈り物になるのです。それはイエスにならうことです。わたしはここで、二つのことを思い起こしたいと思います。第一に、神の愛のはかりとは、限りなく愛することです。分かりますか。そして、ご聖体をいただき、イエスの愛とともにあるとき、わたしたちのいのちは贈り物になります。イエスのいのちと同じように。これら二つのことを忘れないでください。神の愛のはかりは、限りなく愛すること。そして、イエスに従うことは、聖体とともに自分のいのちを贈り物にすることです。

(教皇フランシスコ「お告げの祈り」より一部抜粋)



初聖体・祝福式

6月22日(日)10時ミサで、アルフレド主任司祭による6人の子供達の初聖体、2人の子供達の祝福が行われ、ミサの後イグナチオホールで教会学校のお友達、ご父兄もも参加して、お祝いのパーティが開かれました。





<行事報告>

カメラータ・ヘンゼラーによる祈りと音楽の集いに参加して

6月1日、主の昇天の祝日の午後、主聖堂に於いてリコーダーのデュオによる祈りと音楽の集いが開催されました。エヴァルト・ヘンゼラー師と大津磨由美さんによるリコーダーに教会のオルガニスト、三浦優子さんのオルガンが加わったトリオでもありました。

平素は日曜日という家族主体で過ごすため、ミサの後にはなかなか催し事に参加できないのですが、リコーダーという小学生の頃から身近にありながら、滅多に本物の演奏に接する機会のない楽器に惹かれ、家族も誘って午後のお御堂に入りました。メディテーションではあるのですが、配られたプログラムを見渡すと、バッハから日本の今の作曲家の作品の初演に至るまで、ワクワクするような内容・音楽に心を委ねることが祈りの境地に通じるということでしょうか。

バッハの重厚なオルガンで始まり、ソロ、そしてデュオによる17世紀頃の作品のリコーダー演奏へと続くと、空気が清澄なものへと変化して行くのが感じられます。そしてトリオになると、オルガンが何の主張もせずひたすら調和を生み出して行くのです。後から聞くと、パイプオルガンは何本ものリコーダーが集まって出来たようなものだ。天上から降って来るパイプオルガンの響きには圧倒され、言葉を失くしますが、寄り添うオルガンの音色の美しさは私には発見でした。

楽しかったのは森の小鳥たちの歌声を模した演奏で、ヨーロッパ（特にドイツの森）の小鳥のさえずりは、春になると庭に降りてきてコロラトゥラで歌うアムセルの歌声そのものでした。一方で日本の小鳥たちのさえずりを曲にした作品は幽玄な美しさで、なんとその演奏が初演。作曲者が会場にいらしたのは嬉しい驚きでした。

マリアの賛歌、詩篇16の祈りの音楽に続いて、最後は明るく、晴れ晴れとトリオで終了。演奏者の三人の方が前日にそれぞれの場から駆けつけて合わせられたとはとても思えない、見事な演奏であったことにも、音楽の中に聖霊の風が吹くのを感じたひとときでした。

(M.H)



日曜日の午後に関わらず、多くの方がリコーダーの演奏に聴き入っておられました。

「祈りと音楽の集い」も今回で12回目を迎えました。音楽チームとしてはその都度企画に頭を悩ましていますが、外部で活躍されている素晴らしい演奏家の協力も得てここまでやってきました。ただ残念なのは、聴きに來られる方は圧倒的に外部からの人が多く、当教会内の信徒の数が少ないことです。私達は、教会内の皆様と音楽を通じて祈りと分かち合いをしたいと思っています。これからもいろいろな企画を立て継続していく予定ですが、是非、一人でも多くの方のご来場を心よりお待ちしております。

音楽チーム一同



《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします

📖 小教区評議会

7月13日(日)10時ミサ後

📖 典礼部

7月19日(土)10時 典礼部会

📖 地区役員会

7月20日(日)10時ミサ後

📖 宣教部

7月27日(日) 部会

📖 教会学校

7月12日(土) 終業式

📖 広報部

8月2日(土) 教会報印刷

📖 施設管理部

7月27日(日) 部会

《お知らせ》 教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★社会活動部より★

7月2日(水) 10時 手芸の集い(第1・第2会議室)

どなたでもご参加ご自由です。

7月12日(土) 10時 炊き出し(イグナチオホールお台所)

小野浜グラウンドにて、配食や、おじさん達のお話し相手だけでもOKです。

7月17日(木) 14時 ベタニアの集い(イグナチオホール)

7月20日(日) 10時ミサ後 ふれあい広場(イグナチオホール)

7月25日(金) 9時30分 ともしび ケーキ作り(イグナチオお台所)

「みんなの広場」原稿募集!

「みんなの広場」にみなさまからの原稿を募集いたします。信仰メッセージに限りません。日々の喜び・悲しみ・感謝、暮らしの中での気付き等、数行でけっこうです。原稿を頂戴しました月に、到着順、洗礼名(ご希望の場合はフルネーム)で掲載いたします。

締切: 毎月15日

提出先: ①教会事務受付

②教会 Fax078-851-9023

③E-mail: renraku@rokko-catholic.jp

※ ご寄稿頂いた翌月号に掲載予定ですが、紙面・編集の都合により、その月に掲載できない場合がございます。ご了承ください。

※ 洗礼名で掲載いたしますが、後日広報部からご連絡させて頂く必要がおこった時のため、提出原稿には必ず氏名・連絡先をご記入ください。



これまで通り、行事に関する報告・お知らせ・感想も随時受け付けております。特に行事に参加された方の感想をお待ちしております。こちらも数行でけっこうです。行事主催者の報告だけではなく、参加者の感想をできるだけ多く掲載したいと思います。

また、シリーズ「忘れないで! 東日本の被災地から」への原稿も募集しています。被災地でのボランティア活動に限らず、遠く神戸からの支援活動や被災地への思い等をお寄せください。

教会報はみなさまのご寄稿なしには成り立ちません。教会報の紙上がもうひとつの私たちの共同体となりますよう、みなさまのご協力どうぞよろしく願致します。 広報部一同

～．～

《 図書室からのお知らせ 》 2014年6月に入った図書から

☆ **使徒的勧告 福音の喜び** —— 教皇フランシスコ 著 カトリック中央協議会
「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」をテーマとしたシノドス後の使徒的勧告。教会全体を熱意と活力に満ちた宣教の新しい段階へと励まし方向付けるための、愛と希望に満ちた具体的提言。(本書 帯より)

昨年11月24日(信仰年閉幕の日)に発表された教皇フランシスコの使徒的勧告の、待ちに待たれた邦訳版。パパ様の熱い思いと息遣いとともに、私たちに宣教者への使命を伝え、そのための勇気を与えてくれる。



みんなの広場

スイスを訪れて

友人を訪ねて、スイスに行ってきました。

皆さんもご存じのとおり、スイスは永世中立国であり、しかも民兵制度をとっています。

その他にも、話を聞いていると、日本とは全く違い、なかなか興味深い国です。

スイスには自国語というものがなく、ドイツ・フランス・イタリアという周辺の大国の言語を公用語としている。バチカンの衛兵でお馴染み、傭兵産出国。国連の欧州本部が国内ジュネーブにあるにもかかわらず、国連には2002年に190番目の国として加盟した。重要な政治案件はほとんどすべて国民投票によって決せられている。

中でも驚いたのが、直接民主制の運営の仕方。国民投票もそうですが、ある地方では今でも全住民が一日、一堂に会し、州の重要事項をすべて決することを行っているらしい。人口一万五千人ほどの小さな州だからできることだが、住民が町の広場に集まり、州の首相と閣僚を選任したり、法律の改正などが討論され、挙手での表決がなされるという。小学校のホームクラスを思い出すが、規模は400倍といったところ。集会の所要時間は二時間半、住民は立ちづめ。

見学していたフランス人が、「こんなこと、うちの国では不可能だ。第一、二時間半もワインも水も飲まずに住民を立たせておいたら確実に暴動が起こる」と言ったとか。このコメントはそれで笑えるものか・・・。

国民が選んでしまったとはいえ、政府がすることに納得がいかない昨今の日本を思うと、責任の重さはあるものの、何かうらやましい気もする政治体制である。

ただ、ここまできて、はっとした。自分の身近な共同体である教会・小教区に対して自分は責任を果たしているだろうか。

地区会が浸透して、それまで信徒会には所属していなかった身としては、教会のお手伝いをする機会は増えているようにも思えるが、運営に参加しているかといえ、とても胸を張って言えるものではない。先日の年次報告会然り、初聖体・祝福式のパーティ然り。誰かがしてくれると甘え、

私くらいいいでしょ、と失礼している。家族のことなのに？ほったらかしでいいの？文句は言うのに、建設的な意見は言えない。自分の家でもあるのに、よくしたいと思わないの？

流されない自分というものを持ち得て、果たせる責任を負えるような大人でなければ直接民主制などというものは運営できないのだろうか。

少し心が痛んだので、信徒の責任として、自己反省も含め、筆をとりました。

(参考文献：スイス探訪 國松孝次・著 角川書店)
マリア・フランシスカ



六美会（絵画同好会）からのお知らせ

六甲教会では15年前から、信徒であり日本画家でいらっしゃる信国睦子先生のご指導のもと絵画教室を月1回開いてきました。只今その作品展を信徒会館ロビーで7月3日(木)まで開催中です。つたない作品ではありますがご覧いただければ幸いです。なお、本展をもちまして六美会は解散することになりました。

これまでお稽古の日はいつも、和気あいあいとした雰囲気の中で描く事が出来ました。先生のちょっとしたお言葉や筆を入れて下さることで、絵がグッと生きてくることを何度も経験しました。

これらの経験を通して私たちに絵を描く喜びを教えてくださいました。長きにわたり、時には持病のため手に痛みがおありでも、優しくご指導して下さった信国先生に改めて感謝申し上げます。

また、この会にご理解とご協力を頂きました神父様、教会の皆様に厚く御礼申し上げます。



神に感謝 六美会 一同

教会報8月号の発行は、8月3日(日)です。
編集会議は、7月27日(日)です。
記事原稿は、7月20日(日)正午までに信徒会館
受付へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会
〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21
電 話 078-851-2846
F A X 078-851-9023
発 行 責 任 者 アルフレド・セゴビア
編 集 広 報 部